

「いのちは誕生から始まる」からの抜粋

<https://ichthys.com/mail-life-begins-at-birth.htm>

からの翻訳

ロバート・D・ルギンビル博士著

質問 #1:

親愛なるルギンビル博士へ。資料をオンラインで、しかも無料で提供してくださりありがとうございます。とても興味深く読みました。ですが「サタンの反乱 パート3」の一部について問題があります。あなたが、マリヤの胎内にいる子どもを単なる“thing(もの)”と言っているように読めてしまい、まるで中絶を擁護する議論をしているように感じます。なぜ「サタンの反乱」というテーマの中で、このような小さな脱線をしてまで、中絶擁護のような議論を進めたのでしょうか？

回答 #1:

これらの資料が多少なりともお役に立ったと知り嬉しく思います。また、あなたの懸念もわかります。そしてまず申し上げたいのは、主の胎内にあった未出生の身体の重要性を少しでも軽んじる意図は、私には一切ないということです。あなたがこの学びを読み進めるなら、私がイエス・キリストへの献身に確信を持っていること、また聖書が宣言する通りに主を「完全な神性と真の人性を持つ唯一無二のお方」として教えていることについて、疑いは残らないと思います(そして後者=真の人性は、マリヤの胎内で主の身体が神的に受胎されなければ不可能だったことは言うまでもありません)。あなたのさらなるコメントの趣旨について申し上げるなら、私は中絶を正当化したり、支持したり、擁護したりする意図は全くありません。この主題について私が多くを語らないのは、私が思うに、聖書自体がほとんど語らないのと同じ理由です。すなわち、神の御心に明白に反する行為は、長い解説を必要としないからです。確かに「いのちは胎内から始まる」という考えが中絶反対の根拠として用いられてきたため、「聖書が示す『いのちの開始点』を別に捉える者は中絶擁護だ」と推測されやすいのは理解します。しかしそれは論理的に必ずしも成り立ちません。ヨナを魚が本当にのみ込んだとか、紅海が主によって実際に分けられたとか、ギベオンで太陽が本当に止まったのだと教えることは、「明らかに科学に反する立場」を擁護することになり、その結果、キリスト教全体の信頼性を損なうので、キリスト教の大義にとって有害だと感じている、いわゆるクリスチヤンは少なくありません。しかし、私は、たとえ科学的に居心地が悪く、また特定の政治的議題にとって不都合であっても、聖書を信じ、教え続けます。

聖書の中には、最初は理解しにくい事柄が数多くあります。ある場合には、理由はさ

さまざまあれ、私たちの感情や価値観に引っかかる内容でありますし、またある場合には、なぜそれが重要なのか分からぬ情報であります。しかし私の経験から言えば、聖書の一つひとつの言葉、そして教理のあらゆる原理は、最終的には必ず重要であることが明らかになります。したがって、どの点であれ、聖書を誤って読み取ったり、誤解釈したりすることは、程度の差こそあれ、必ず害をもたらします。もし「命は誕生の時に始まる」という聖書的教えを弁護するよう求められたなら、私はこう述べるでしょう。すなわち、この出来事は科学的観察では受け入れがたいほど奇跡的であるだけでなく、これと反対の考え方とは、人間が命の主導権を握っているかのような印象を与えててしまう、ということです。つまり、命は本質的に生物学的な過程によって生じ、人間がそれを生み出しているかのように見えててしまうのです。そして、その命の起源を何千年も前に神にさかのぼらせたとしても、その印象を大きく修正することにはなりません。しかし、神が誕生の瞬間に(呼吸という同時のしとともに)命を与えられるという理解は、人の命という出来事を、①明白に奇跡的なものとし、②完全に神の御手の中にあるものとし、③生物学的というよりも靈的な出来事として位置づけることになります。これは、新生(新しく生まれること)についてもまったく同じことが言えるのではないかでしょうか。

最後に念のため、私がこの点を述べた箇所([「サタンの反逆」第三部](#))の一部を引用します。私は「神が誕生の時に人の靈を与えることが人の生命を成立させる」と説明する中で、次のように述べています：

これは決して、「人間の靈が誕生時に与えられることが人間の生命の根柢である」という理由によって、胎児が神の御前において価値を持たない、ということを意味するものではありません。むしろその逆であり、聖書において胎内にある者は非常に尊い存在として扱われています([出エジプト記 21 章 22 節](#); [ヨブ 10 章 8-12 節](#); [詩篇 139 篇 13-16 節](#); [イザヤ書 44 章 24 節, 49 章 4-5 節](#))。さらに聖書では、子どもは大きな祝福であるとされています([サムエル記上 2 章 1-11 節](#); [ルカ 1 章 46-55 節](#)参照)。一方で、不妊は呪いとして描かれることが多く([ホセア 9 章 14 節](#); [創世記 38 章](#); [レビ記 20 章 20-21 節](#); [サムエル記上 1 章 11 節](#)参照)、妊娠は祝福であり、ときには正当性の証しとして与えられることさえあります([民数記 5 章 11-31 節](#); [ルカ 1 章 25 節](#)参照)。それに対して、子どもをいにえとしてささげる行為は、神の前において忌むべきこととされています([レビ 18 章 21 節](#); [申命記 12 章 31 節, 18 章 10 節](#); [詩篇 106 篇 37-38 節](#))。

私がここで述べているのは、決して人を不快にさせることや、明らかに罪であり忌むべき行為である中絶を擁護することを目的としたものではありません。しかし、あなたが

言及しているこの研究(「サタンの反逆」第三部)は「人間の生命の起源」を扱っているため、神がいつ、どのようにして生命を与えられるのかという問題は、決して本題から外れた話ではありません。とりわけ今日のキリスト教界には、聖書に基づかない前提や思い込みが数多く広まっているからです。

あなたは私に命を与え、恵みを示し、あなたの摂理によって私の靈を守られた。(ヨブ記 10 章 12 節/NIV 訳)

あたかも存在しなかったかのように／母の胎から墓へと運ばれていればよかつたのに。(ヨブ 10 章 19 節/新共同訳)

使徒行伝 17 章 25 節(ネヘミヤ 9 章 6 節; 第一テモテ 6 章 13 節参照)が語っているとおり、私たちに命と息と万物を与えておられる方のうちにおられるのが、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストです。

あわせて次の資料もご参照ください。

「生殖と神の直接的創造の違い」

「生命はいつ始まるのか」

ボブ・ルーギンビル

質問 #2:

ルギンビル博士へ。今夜遅くにメールしています。ちょうど「サタンの反乱 パート3 (人の目的・創造・墮落)」を読んでいて、ある箇所について書かずにいられませんでした。特に「人の靈は、神によって創造された」という主張(見出し番号は正確でないかもしれません)に衝撃を受けました。これは確かに奇跡ですが、人の靈を伴う「いのち」はもっと早く始まるはずです。

出生前に意識や感情があることを示す聖書箇所があるように思えます。ルカ 1 章 41 節で、妊娠中のマリヤの声を聞いてヨハネが跳ねたとあります(エリサベツ妊娠 6 か月、マリヤは受胎したばかり)。この一見些細な節が、靈の付与が出産より早いことを示しているように思えます。ヨハネは、マリヤが宿していた「神性の人間性」に反応したのでしょう。受胎の時点から、イエスは周囲に影響を及ぼしていた。神人となったのは出生ではなく受胎そのものです。私たちも同じだと思います。

私は小児科／内科医として多くの出生と死を見てきました。極度の未熟児で息がで

きないまま死くなる赤ちゃんが、死になる前に触れられて反応するのも見ました。また胎内の子どもが、親の声に反応するのも経験しました。

「靈が誕生時にのみ宿る」という教えが、中絶を容認する方向に用いられる恐れれます。もし神の臨在が誕生の過程で初めて与えられるなら、それ以前に中絶してよいことになりかねません。部分出産中絶なども誤用される恐れがあります。あなたがそういう意図を持っていないことは願っていますが、弱い信徒がつまずく危険を感じています。

決してご不快にさせる意図はなく、キリストにある兄弟として、愛をもってこの手紙を書いています。私は神学、古典、言語などの分野において、あなたほどの学識を持っているとは到底言えず、そのような方に対して疑問を呈すること自体、正直なところためらいも覚えています。

それでもなお、こうした個人的な不安や未熟さを抱えつつも、どうしてもお伝えすべき懸念があると感じ、このように筆を取りました。どうか、先に挙げたルカ福音書の該当箇所を、先に言及した研究における教えとの関連において、祈りつつご一考いただけましたら幸いです。

キリストにあって、敬意をもって
(署名)

回答 #2:

ご心配には及びません。お気遣いなくお答えできることを嬉しく思います。この問題は、言うまでもなく非常に繊細なテーマです。私は中絶という行為について、これまで常に強い心の痛みを覚えてきましたし、個人的にそれを容認している、あるいは聖書がそれを容認していると考えているかのような印象を与えるつもりは、いかなる意味でもありません(聖書がそれを容認していないことは、疑いようもありません)。まずこの点を明確にしておきたいのは、「誕生時に靈的生命が与えられる」という教えを語るにあたり、私がどこから出発しているのかを、はっきりご理解いただきたいからです。多くの人がしているように、「少なくとも何らかの意味で肉体的生命は受胎時に始まるのだから、靈的生命も同様に受胎時に始まるに違いない」と前提するほうが、はるかに容易な道でしょう。しかし、このミニストリーの根本原則は、「どこへ導かれようと、聖書に従う」という点にあります。そしてその観点から言えば、靈的生命が誕生時に始まるという原則は、私の理解では、多くの人が異議を唱えない他の教理的原則よりも、むしろ容易に聖書から確立できるものです。この点は、あなたのメールの性質そのものによっても

裏づけられていると私は考えています。確かに、あなたはご自身の立場を支えるためにいくつかの聖書箇所を挙げておられますが、率直に言えば、その異議の多くは聖書的というより、むしろ体験的なものに基づいているように思われます。つまり、あなたは人生経験から抱いている理解ゆえにこの教えに心を痛め、その経験を支持するため聖書を参照しておられるのであって、聖書そのものに対する従来の理解から、この教えを第一義的に問題視しておられる、というよりはそう見受けられるのです。もちろん、このようなアプローチに価値がないと言うつもりはありません。私たちは皆、それぞれ異なる形で御靈に導かれていますし、どの教えに自らをさらすかを吟味する責任も、それぞれが負っています。ここで私が申し上げたいのは、ただ一点、もしこの問題について純粋に個人的な感情だけに基づくなら、私自身もあなたと同じ立場を取る傾向があるだろう、ということですし、そうすれば多くのクリスチヤンの目において不快感を避けることもできたでしょう。しかし、聖書は私を別の方向へ導きました。そして、ある種の人々がこのような教えを反聖書的な実践を正当化するために用いる可能性があるという点が事実だとしても、「善をなすために御言葉を意図的に曲解することほど危険なものはありません。それは最も滑りやすい坂道です。そして、今回あなたが問うているこの件においても、聖書がさまざまな政治的行動を支持するために用いられてきた実例を見ることができます(そして、私の見解では、いかなる形であれ政治が絡むところには、悪魔は決して遠くありません)。私自身の考えをはつきりさせるために、ここで、あなたが読んでおられる研究の中から一つ引用し、誤解のないよう記しておきたいと思います。

これは決して、「人間の靈が誕生時に与えられることが人間の生命の根拠である」という理由によって、胎児が神の御前において価値を持たない、ということを意味するものではありません。むしろその逆であり、聖書において胎内にある者は非常に尊い存在として扱われています([出エジプト記 21 章 22 節](#); [ヨブ 10 章 8-12 節](#); [詩篇 139 篇 13-16 節](#); [イザヤ書 44 章 24 節, 49 章 4-5 節](#))。さらに聖書では、子どもは大きな祝福であるとされています([サムエル記上 2 章 1-11 節](#); [ルカ 1 章 46-55 節](#)参照)。一方で、不妊は呪いとして描かれることが多く([ホセア 9 章 14 節](#); [創世記 38 章](#); [レビ記 20 章 20-21 節](#); [サムエル記上 1 章 11 節](#)参照)、妊娠は祝福であり、ときには正当性の証しとして与えられることさえあります([民数記 5 章 11-31 節](#); [ルカ 1 章 25 節](#)参照)。それに対して、子どもをいけにえとしてささげる行為は、神の前において忌むべきこととされています([レビ 18 章 21 節](#); [申命記 12 章 31 節](#), [18 章 10 節](#); [詩篇 106 篇 37-38 節](#))。

ルカ 14 章 1 節についてですが、特に医師であるあなたに対してあえて指摘するまでもないことと思われますが、ヨハネが胎内で実際に何かを「聞いた」と考える必要は

ありません。ほかのいかなる胎児と同様、胎内で言語的内容を聴覚的に理解することはできなかったはずです。さらに言えば、ヨハネはまだ人間の言語を理解しておらず、意識もまだ確立していませんでした。私自身の当該箇所のギリシャ語読解によれば、そこで言及されている「喜び」はヨハネ本人に属するものではなく、エリサベツに属するものです(リンク先の第二回答「ヨハネは胎内で『喜んで躍った』のか？」をご参照ください)。私はこの種の事柄について実地の経験はほとんどありませんが、一般に、妊婦の胎内における胎児の反射的な動きは、母体の感情的・身体的反応と対応して起こる場合がある、という理解で正しいのではないかと思われます。この場合、エリサベツはマリヤの声を聞き、マリヤがイエスを宿していることを知って、感情的反応を示しました。そして、この文脈において「御靈に満たされた」と記されているのはヨハネではなくエリサベツの方です。ヨハネについては、注目すべきことに、「**生まれた時から**」御靈に満たされると述べられており、これは胎内にいる間ではなく、胎外に出た時点からであることを示しています。

この単一の箇所(そして私の見るところでは、この説明はこの主題について聖書が語っている他のすべての内容とも完全に整合しています)に対して、むしろ私は、人のいのち——すなわち靈的いのち、個人としての私たちの存在の始まり——が誕生時に始まる事を示す証拠は、圧倒的に多いと言えると考えています。ここでその証拠をすべて繰り返して論じる必要はありません(特にあなたはすでに SR #3 を読んでおられますし、やや新しい版はリンク先 Basics 3A: Anthropology にもあります)。要するに、次の点を挙げれば十分だと思われます。すなわち、第一のアダムの場合、神が彼の鼻に「いのちの息」を吹き込まれ、その結果として彼は「生きた者」となりました。そしてまた、最後のアダムである私たちの主イエス・キリストの場合にも、誕生の時に「ここにわたしはおります」と宣言され(ヘブル 10 章 5-7 節)、その到来は誕生の出来事として告げ知らされています(ルカ 2 章 1 節以下)。この両者の事例において、真の靈的存在の始まりの時点として示されているのは、いずれも誕生なのです。

あなたのメールに込められているお気持ちは、よく伝わってまいりました。私のこの返信も、同じように配慮と関心の思いをもって書かれていることを、どうかご理解いただければ幸いです。

この件については、どうぞご遠慮なく、またいつでもお書きください。

いのちであり、真理であり、唯一の道であられるお方、私たちの愛する主、救い主イエス・キリストにあって。

ボブ・L.

質問 #3

宛先

ルギンビル博士

早速のご返信をありがとうございました。本日、仕事を終えるのを心待ちにしておりました(メールを確認して、先生からお返事をいただけているのではないかと期待しておりました)。

まず最初に、中絶の件について触れさせてください。私の質問は、いかなる政治的主張や個人的な運動を推し進めようとする意図によるものでは決してありませんでした。むしろ、この話題が今回のテーマによって複雑になり得る一例として挙げたものです。この点について率直にお話しくださったことに感謝いたします。

また、人間としての私は、意見を形成する際にしばしば自分の経験に依拠してしまう傾向があることも認めたいと思います。これは医療の分野でも同様であり、判断は医学文献、経験、そして患者の意向に基づいて下されます。靈的な事柄に関しては、職業上の領域ほど「文献」(すなわち聖書)に依拠していないことを、恥ずかしながら認めざるを得ません。この点について、やさしく思い起こさせてくださったことに感謝いたします。

先生からのご返信、またウェブサイト上ではほぼ同じ質問に答えておられる内容を拝読いたしましたが、それでもなお、私は先生のご見解とは一致しない思いが残っております。確かに、最初のアダムに関しては、神が無生物である塵にいのちの息を吹き込まれ、その結果として生きた存在(あるいは魂)が創造された、という点には私も同意いたします。しかし、「受胎した存在(conceptus)がいつ人間となるのか」という問題——これは医学における最大級の倫理的論争の一つであり、先生が適切にご指摘くださったように政治とも関わる問題ですが——は、この箇所によって直接扱われているとは思えません。また、胎児は周囲を意識していないという先生のご前提は、科学的には支持されていないように思われます。研究によれば、胎内の乳児は光、音楽、声に反応を示します。実際、胎児は「聞き慣れた」声(すなわち両親)と、そうでない声とを区別することさえできるとされています。41 節で聖霊に満たされたのがエリサベツである、という点には同意します。しかし、私の英語訳では、それはヨハネの反応の後に起くる出来事として書かれています。エリサベツがその出来事を説明する際、確かに彼

女は聞き、そして赤子が反応します。44 節は、跳躍／跳ね上がりが単にエリサベツの情緒的反応の例に過ぎない、というあなたの推測を支持しているように見えます。けれども、私はなお疑問に思います。なぜ聖霊によって靈感されたルカが、これら二つの節を含めることにされたのか、と。聖書のいかなる部分も神の靈感を受けていないものではなく、従って理由があつてそこにあるはずです(もしかすると、知的議論を促すためだけ、ということもあるのでしょうか？！)。

靈を持たずに、人は罪ある存在となり得るのでしょうか。罪はただ肉にのみ宿るものなのでしょうか。聖書は、私たちが受胎の時から罪ある者であると教えているように思われます([詩篇 51 篇 5 節](#))。そして、私たちが清められるのは小羊の血によってのみであるとも語っています([イザヤ書 1 章 18 節](#))。この詩篇の箇所が、私の主張をどこまで裏づけるものは分かりませんが、少なくとも、私たちが最初に責任を問われるのが誕生の時ではなく、むしろ受胎の時であることを示しているように思われます。もし人が受胎の時点から責任を問われ得るのであれば、その時点ですでに靈を持っていなければならず、したがつて魂(すなわち完全な存在)であるはずです。神が、無生物的・無意識的なものに対して裁きを下されるとは考えにくいからです。また、[エレミヤ書 1 章 5 節](#)も、実際の誕生以前にすでに完全な存在があり得ることを示唆しているように思われます。神がエレミヤを、生まれる前から選び分けておられたと語られているからです。

以上が、私の考えの大要です。そして、このような一見ざざいにも思える聖書的知見／情報がきっかけとなって、よりいっそ御言葉を読むよう導かれたことを、神に感謝しております。現時点でも、なお先生のご見解に全面的に同意できているわけではありませんが(それはおそらく私自身の理解不足によるものかもしれません)、それでも、これまで払つてこられたご労苦のすべてに心から感謝申し上げます。

先生の教えは、私にとって神の御言葉への目覚めとなりました。先生とそのミニストリーを、神に感謝いたします。

すべての理解を超えておられる御方にあって、
(主にあって)

回答 #3:

あなたの動機がまったく政治的なものではなく、純粋に靈的なものであることは十分に理解しておりますし、もし私の書き方がそれ以外の印象を与えてしまったのであれば、お詫び申し上げます。私が申し上げたかったのは単純に、聖書が誤って理解され、誤

って適用されるとき、その動機が何であれ、必ず意図しない結果を招くということです。そしてその結果は決して良いものではありません。これは「付け加え (addition)」の観点からも真実です(すなわち、先に挙げたように、一般的な誤解を個人的・政治的利益のために利用する例などです)。しかし同時に「差し引き (subtraction)」の観点からも同様に真実です。つまり、あらゆる誤訳や誤解釈は、神の御言葉全体の理解をそれだけいっそう困難にしてしまうのです。これまで私は、ある原則や教理上的一点について、それが理解しにくい、あるいは受け入れにくく感じられる場合、しかも大局から見れば取るに足らないように思える場合であっても、最終的には予想もしていなかった形で非常に重要であると分かる、という経験を何度もしてきました。神が靈的いのちを賜物として与えられるというこの原則についても、まさに同じことが言えます。この理解は、死後から復活に至るまでの中間状態の詳細や、復活の本質に関する多くの点を、私にとって明らかしてくれました(これら照らし出された領域の一部を挙げるだけでも、という意味です)。詳しくは次のリンクをご参照ください:「復活前における私たちの天的・中間的状態」

「小羊の花嫁の復活」

私はしばしば、神のすべての真理を完全に、分裂なく、そして完全なかたちで把握しようとする私たちの試みを、「中心点へ向かって円を描きながら近づいていくこと」にたとえます。中心のまわりを速く巡りながらそこへ近づけば近づくほど、遠心力はますます強く働き、私たちを反対方向へと押し戻そうとします。中心に到達するには、より大きな努力と、ますます深まる献身が必要になります。中心に近づけば近づくほど、それが求められるのです。その一方で、その場にとどまることはそれより容易であり、さらに外へ外へと押しやられていくに任せることは、なおさら容易です内側へと前進する一歩一歩は、必ず挑戦を受けます。しかし後退することは、いつでもたやすいのです。

もちろん私は、自分が真理を独占しているなどと示唆するつもりはありません。むしろ、ここ Ichthys で教えている内容についても、常に柔軟な姿勢を保ち、異論に耳を傾け続けたいと願っています。とりわけ、神の御心を理解し、行おうとして最善を尽くしている信徒の、誠実で真剣な心から出ている問い合わせや異議であるなら、なおさらです。あなたの場合がまさにそうであることは明らかです。そのうえで、あなたのお手紙に対して、いくつか簡潔な点に絞ってお答えしたいと思います。

- 1) アダムの状況が特別であることは確かですが、しかし、なぜ肉体と靈が同時に創造されなかったのか(多くの人が受胎時にそうであると想定しているように)という点は、十分に考えてみる価値があります。神はアダムの肉体と同時にその靈を創造することもおできになったはずですし、もし受胎の場合に想定されているように両者がそれほど

密接不可分であるなら、なぜそうなさらなかつたのでしょうか。私の見解では、これは偶然ではありません。ここで主は、ある重要な点を示しておられるのだと思います。すなわち、いのち——真の意味での靈的ないのち——は神から来るということです。それは、目に見えること、耳に聞こえること、あるいは人の理性が思い描くこととは関わりなく、物質世界とは完全に別次元のものです。アダムの場合、いのちが与えられる過程がこのように明確に区分されていることによって、私たちは次のことをはつきり理解します。すなわち、神が直接に靈を与えてくださらなければ、真の人間的ないのちは存在しないということです。つまり、人が道徳的責任を負う一個の人格として存在するためには、この靈の賦与が不可欠なのです。「いのちの息」を与えられる以前、アダムは單なる人間の肉体にすぎませんでした。心臓が鼓動していた可能性はあったとしても、道徳的責任を負い、応答し、責任ある存在としての意味で「生きていた」わけではありません。さらに注目すべきは、このいのちの付与のしるしが呼吸の開始であるという点です。実際、「息」と「靈」は、ヘブライ語でもギリシア語でも同一の語で表されています。

2)キリストについても、告げ知られ、祝われているのはその受胎ではなく誕生です。ルカの箇所においても、メシア誕生の預言が成就することが強調されています(ルカ 1:45)。また、メシアが「世に来られる」のも誕生の時であって(ヘブル 10:5、同 10:6-7 参照)、受胎の時ではありません。これは、誕生の時にこそ靈(息)が与えられるからであり、ちょうど死の時に靈(息)が離れるのと対応しています(ルカ 23:46)。このことは、聖書の至るところで焦点が当てられているのが受胎ではなく誕生である理由を説明しています。すなわち、人が人格的存在となるのは誕生の時であり、その時に神が人に人間の靈を与えられるからです。この点についてはここで繰り返すよりも、詳しくは BB 3A「人間の靈(The Human Spirit)」をご参照ください。

3) このことは、詩篇 51 篇 5 節などの箇所についても同様に当てはまります。そこでは、罪深さはダビデという本人については誕生の時に帰されていますが、受胎については母の側に帰されています。すなわち、罪は肉体的生殖を通して受け継がれていますが、その責任が本人に帰るのは誕生の時からだということです。なぜなら、その時に神がいのちを与え、その人自身が人格的存在として実在し始めるからです。

**見よ、私は罪のうちに生まれ、
罪のうちに母は私を宿しました。(詩篇 51 篇 5 節/ESV 訳)**

この節の両半はともに、罪の性質、すなわち墮落以降、人類に共通の遺産となっている「肉に宿る罪(sin-in-the-flesh)」について語っています。あなたの E メールのこの

部分は、私の考えでは、「パズルの一つ一つの断片が他のすべての断片に影響する」という私の主張を、きわめて印象的に裏づけているものです。実際のところ、靈(spirit)は、いかなる意味においても罪の影響を受けて変質することはありません。この点は、罪論(hamartiology)のあらゆる問題において非常に重要です(BB 3B 参照)。だからこそ、復活において変えられるのは身体だけであって、靈ではありません。私たちの罪が赦されたとき、私たちには、もはや腐敗していない新しい身体が必要となります。しかし、そのような身体のうちにあって、もはや「肉に宿る罪」の影響を受けない靈には、何らの変化も、変質も必要ありません。靈——それこそが私たちの最も内奥における「私たち自身」ですが——それ自体は腐敗していません。むしろ、十字架において贖われ、また私たちの日々の歩みにおいて悔い改められるべきであったのは、腐敗した肉の影響のもとで私たちが行った行為のほうなのです。

責任能力(accountability)の点について申しますと、それは道徳的な問題であり、地上での人生を少なくとも数年は経た後になって初めて到達する段階のものです(BB 3B「いわゆるアダムの罪の帰属[The so-called Imputation of Adam's Sin]」参照)。罪の性質(sin nature)を持っていることは、やがて個人的な罪(personal sin)を犯すことを必然的にします。しかし、胎内において罪を犯すことは不可能です。なぜなら、そこにはまだ独立した行為の機会が存在しないからです(すなわち、まだ靈[spirit]がなく、自由意志[free will]がなく、人格[person]が存在していないからです)。神は確かに胎児を尊ばれます。そして胎児は、やがてこの世に生まれてくる「来たるべき人格(person-to-be)」についての確実で疑いのない約束を示しています。このことは祝われ、また期待されるべきものです。そしてこの事実こそが、ルカ1章40-45節が聖書に含まれている理由の一端でもあるのは間違ひありません。エレミヤ1章5節が実際に語っているのは、主がエレミヤを胎内に形造られる前、すなわち受胎以前から彼を知っておられた、ということです。神は確かに私たち一人ひとりを知っておられ、宇宙が造られる以前から私たち一人ひとりを知っておられました。しかし、神が私たちに命を与えるまでは、私たちはまだ「生きている」ではありません(少なくとも聖書的意味においてはそうではありません)。

4)前回のメールでも申し上げましたとおり、この種の事柄についての現在の医学的知識や見解の状態に関しては、私が不利な立場にあることは十分承知しています。ただし、ここで私が非科学的な意味で言っている「意識がある(conscious)」ということ、すなわち、ある状況に対して自由意志(free will)をもって応答できるという意味では、そのことは胎内の胎児には当てはまらない、と指摘するのは妥当であると私は考えていました。この点について医学的にどのような専門用語が用いられるかは別問題です。ルカの当該箇所に関して本質的な問い合わせはこうです。すなわち、**「ヨハネは胎内にいる間、

すでに生きた人間であったのか？」**という問いただしです。この問いかけてから、多くの人々が力強く「そうだ(yes)」と答えるであろう理由も、またそう答えたいたいと願う理由も、私は十分理解しています。しかしながら、私の聖書理解においては、これとは反対の方向を示す多くの証拠が存在しており、反対説を支持するうえで説得的と私が考える材料は見出せていません。神が確立され、私たちが最初の無垢なまなざしで見つめるように示されたこの世界そのものが、誕生(birth)を生命の始まりとして宣言しているのです。科学はさらに深く掘り下げ、別種の証拠を提示しますが、それは純粋に物質主義的観点からのものにすぎません(すなわち、人が人格となるのは神が個別的に「命の息(breath of life)」を与えられる時である、という考えを一般には全く受け入れない立場です)。しかし聖書は、私の理解するところでは、「自然そのもの」が初めから私たちに語ってきたことを裏づけています。すなわち、神によって与えられる生命は、最初の呼吸とともに、靈(spirit)が与えられるその瞬間、誕生において始まる、ということです。

結局のところ、神こそが私たちに靈(spirit)を与える御方であるという点は、議論の余地がありません(伝道者12章7節、イザヤ42章5節)。そして、「靈(spirit)」と「息(breath)」とは、聖書的表現においてほとんど区別できない、事実上同一の語彙項目であり、「息」は「靈」が与えられたことのしるしとして描写されています。そうであるならば、神がその靈、すなわち「息(breath)」を、誕生ではなく受胎の時点で与えられる、などということが、いったいどのようにしてあり得るのでしょうか。さらに言えば、そしてこれはこの点に関して私の見解を変えるためにぜひとも答えていただきたい核心的な問い合わせですが、聖書がこの主題について実際に語っている内容から、**「命の息(breath of life)」[創世記2章7節]**という表現が、「息」と「生命(life)」とが同時に与えられるゆえにその名で呼ばれている、という理解以外の何を読み取ることができるのでしょうか。

明らかに、胎内の子ども(the unborn child)はきわめて重要な存在です。しかし私は、エリサベツでさえ、自分の胎内の子を「すでに存在している人格(a person-in-being)」というよりも、「これから人格となる存在(a person-yet-to-be)」として語っているように思われます(私の考えでは、「喜び(joy)」を子ではなくエリサベツ本人に帰していない翻訳は誤りであるとしても、です)。「あなたのあいさつの声が私の耳に入ったとき、胎内の子は喜んで跳ねた」(NASB)彼女はその子を「ヨハネ(John)」とも「彼(he)」とも呼ばず、単に「胎内の子(the baby)」と呼んでいます。また、その子を、この会話に参与している人格であるかのように彼に語りかけてもいません。ここには明確な距離があります。それは、すべての「まだ生まれていない者(the yet-to-be born)」に自然に、そして必然的に存在している距離と同じものです。なぜなら、子宮内(in utero)においては、直接的な相互交流(direct interaction)が成立し得ないからです。私の見解で

は、これは神のご計画における偶然(an accident of divine design)ではありません。むしろ、ここで私が論じてきたことを裏づけ、強化する要素です。すなわち——胎内の子どもたちは、**将来人格となる存在(prospective persons)**であり、その意味においてきわめて重要であり、最大限に尊重され、守られるべき存在ではあります。しかしながら、彼らは、真の意味での生きた人格(true living persons)としての、独立した靈的生命(independent, spiritual life)をまだ有してはいません。その靈的生命は、神が人間の靈(human spirit)を授けることによって、すなわち**「命の息(the “breath of life”)」**を与えることによって初めて成立します。そしてその賜与は、誕生の時点(the point of birth)までは与えられない、というのが私の主張なのです。

私はこの点についてあなたの同意を期待していませんし、要求もしません。しかしこの種の事柄に応答することは私の務めです。そして、私の言葉が、聖書が宣言していると私が信じる真理のために立つ、誠実な努力として受け取られることを願います。このことを通してあなたがより深く聖書を考えるよう導かれていることを、私は喜びます。私の経験と観察では、それは神の御靈に応答してそうする者にとって、常に良いことしかもたらしません。これが靈的成長の過程であり、そこには大きな喜びと大きな報いがあります。

そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。こうして、わたしたちはもはや子供ではないので、だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによって起る様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなく、愛にあって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達するのである。また、キリストを基として、全身はすべての節々の助けにより、しっかりと組み合わされ結び合わされ、それぞれの部分は分に応じて働き、からだを成長させ、愛のうちに育てられていくのである。(エペソ 4 章 11-16 節)

私の願いであり祈りは、あなたがこれからもイエスのために、靈的成長(spiritual growth)と実りある働き(production)を続けていかれることです。

唯一の真理であられるお方、私たちの愛する救い主イエス・キリストにあって。

ボブ・L.

